The Japanese Institute of Landscape Architecture

技術報告編

石川県輪島市大沢地区・上大沢地区における間垣の特徴について

The Characteristics of Magaki in Ousawa and Kami-Ousawa on Wajima City, Ishikawa Prefecture

荒井　歩* 荒井　清児**
Ayumi ARAI Seiji ARAI***

1. 調査の背景と目的

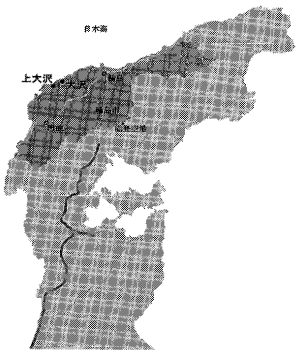
(1)調査目的

能登半島の日本海外浦に立地する集落では、従来季節風対策の「間垣」と呼ばれる防風柵が設置されてきた[1]。しかしその数は減少し続け、現在ではまとまった間垣を有する集落は輪島市内で4箇所程度に過ぎないと言われている。その中でも、大沢地区および上大沢地区は間垣集落として貴重な固有景観を残す地区である[2]。

そこで本調査では大沢地区および上大沢地区を調査対象地とし、地区固有の景観構成要素である間垣について調査を行った。今後の集落景観の保存に資するために、間垣の現状を把握するとともに、補修技術の側面も明らかにすることを目的とした。

(2)調査対象地の位置概要

調査対象地である大沢地区および上大沢地区は、能登半島の北西部に位置する輪島市に属する。輪島市は2006(平成18)年2月に旧輪島市と門前町が合併し、現輪島市となった。本調査対象2地区は、輪島市街の西南部に位置する西保地域内(上山町、西二又町、上大沢町、大沢町、赤崎町、下山町、小池町)に立地する。当地域は能登半島の中でも比較的急峻な地形からなり、また日本海に面することより特徴的な気候を有するとされる。



図−1 調査対象地位置図

2. 調査方法

(1) 間垣集落概要の把握

文献調査および2005(平成18)年11月に実施したヒヤリング調査から、間垣集落が立地する地形的特徴、気候的特徴、植生的特徴および歴史的特徴を明らかにした[3),4),5)]。それらを踏まえ、周辺環境からの影響を鑑みた間垣集落景観の構造を明らかにした。

(2)間垣のタイプ分類

集落内における間垣の現状を把握するために、2005(平成17)年11月～2006(平成18)年1月に現地調査を行った。現地調査では、集落内における間垣の分布状況の確認、間垣の寸法計測、簡易測量、形態特性調査を行った。これらの調査結果をもとに、伝統的な間垣の判断基準検討を念頭に間垣のタイプ分類を行った。

(3)間垣の構造把握

現地において間垣の詳細構造について寸法計測等の調査を行った。間垣の立面および断面の構成を記録し、形態や景観的特徴を整理した。

3. 結果

(1)間垣集落の概要

1)地形的特徴

西保地域の地形は、標高の比較的高い山と深く狭い谷から構成されているため、谷底平野の発達が乏しい。また、地すべり地形が発達しており、集落や耕地の多くがこの地すべり地に立地している。地域内の大半の集落は、このような地形に制限されて、海面からはるか高い位置に形成されている。しかし大沢地区および上大沢地区のみは海岸に直接面した低地に位置する。そのため両地区とも谷に立地し、大沢地区には桶滝川と谷内川の2本の河川が、上大沢地区では西二又川が流れる。これらの地形的特徴は、季節風の強風化の一要因とされている。

両地区ともに海岸線は湾となっており、特に大沢地区に接する日本海は深い湾入をなし、江戸時代から大沢港として利用されていた。1935(昭和10)年頃から1939((昭和14)年にかけて築港工事が行われたが、冬季の季節風による影響から船の碇泊が困難であったため、戦後に再度修築工事が行われ、現在に至っている。一方上大沢地区の海岸には砂浜があり、五色石[6)]とよばれる小砂利がみられ、小規模な港が整備されている。

2)気候的特徴

(ⅰ)気温について

能登半島は、日本海側特有の冬季の季節風が吹きつける豪雪地帯である。一方、夏季は高温になりやすい気候的な特徴をもつ。また半島であるため三方を海に囲まれており、その他の北陸地方とは違った気候特性を示す。気温は寒暖の差が激しく、沿岸が高温、内陸が低温でその差は約2～3度あるとされる。

大沢地区および上大沢地区は、日本海に面することもあり、内陸山間部に立地する集落と比べて冬季の気温が

*東京農業大学地域環境科学部
**L.W.G. Co.,Ltd.
*Tokyo Univ. of Agric. Fac. of Regional Env. Sci.
**L.W.G. Co.,Ltd.

NII-Electronic Library Service

The Japanese Institute of Landscape Architecture

温暖で、積雪量が少なく、根雪期間も短い。一方、内陸の根雪期間は数ヶ月にも及ぶ。

(ii)風について

西保地域の日本海に接した地区は、夏季は南西の風が卓越し、冬季になると北西の季節風へと変化する。夏季の南西風は「クダリ」と呼ばれ、降雨をもたらすことが多く、海上は時化となるため警戒される。一方、冬季に吹く北東風は、一般に晴天をもたらし「アイの風」と呼ばれる。また早春の乾燥した風はフェーン現象と呼ばれ、気温の上昇と極度の空気の乾燥をもたらす。

西保地区における山間諸集落では、地形が細かいため冬季の季節風は緩和されるが、大沢地区、上大沢地区は海岸に面していることから強風にさらされる。

また海岸部では、夏季の晴天時にはおだやかな海陸風があり、昼は海から海軟風が、夜は山手から陸軟風が吹く。海軟風は日没とともに止み、しばらく凪と呼ばれる無風状態となる。やがて涼しい陸軟風が吹き始めると、昼の暑さがやわらげられる。この海陸軟風の交代は海岸凹部に位置する大沢町および上大沢町において最も明瞭に感じられる。

3)植生的特徴

西保地区には自然林がほとんどなく、二次林あるいは植林により植生が構成されている。またアカマツはほとんどなく、クロマツが大部分を占めることから、海風の強さの影響があるものと考えられる。

1959(昭和35)年当時の西二又町にはマダケ(一部ハチク)の群落があった。ヤダケやニガタケの藪は川岸等に生育しており、間垣の材料として伐採されている。

広葉樹の構成樹種としては、かつて大沢地区の家内工業であった輪島漆器の木地製作用の原木として重要であったケヤキ、薪炭材としてのクヌギ、ナラ、カシ、クリがみられる。また林内にはフジやクズが繁茂している。

4)歴史的特徴

文献調査では、間垣の歴史に関する直接的な情報を得ることができなかった[3,4]。間垣が口頭で伝承される類の技術であること、集落における度重なる火事による資料紛失が理由としてあげられる。そこで、大沢地区および上大沢地区の集落環境に関わる記録の中から、間垣の様子がうかがえる記述を整理した[3,4]。

(i)大沢集落

大沢集落は、三方を山に囲まれ、日本海に臨む小湾に接している。集落内を流れる小河川により作られた沖積層と河岸段丘・海岸段丘の上に発達した集落である。

中世、大沢は志津良の庄の中心地であった。近世に入り、前田藩から筒井家が十村役を任じられ、大沢は西保地区における文化的な中心地となった。しかし、近代以降は交通機関の発達から取り残され、明治時代、筒井家の没落と共に集落内の旧家も消滅していった。

筒井家および旧家八戸は、海岸に面する集落中心の枢要の地を占めていた。筒井家、殿前家、館家、新家、浦野屋はいずれも強固な石垣によって敷地の二方、あるいは三方を囲み、波よけにしていたとされる。館家の屋敷跡には、石垣の面影が残っている。

(ii)上大沢集落

上大沢集落は、「かめぞ」と呼ばれる100戸以上の集落であったとされる。しかし、住民の大半が北海道へ移住したとされ、1959(昭和35)年には20戸の小規模な集落となっている。

また「能登名跡志」には「上大沢より寺口(注:門前のこと)に出るはよき往来なり、七瀬八滝とて名所あり、辺土には稀なる也。その外家居もありてよき村なり。後山に埋み林とて栗の御林あり」との記録があり、集落の状況がみてとれる[4]。

5)間垣集落における景観構造

上記調査結果を踏まえて、大沢地区および上大沢地区の間垣集落における景観構造を明らかにした。

間垣に囲まれた集落が、山林・水田・海域の接点に立地することで、周辺環境と一体となったまとまりのある集落景観となっている(図-2)。

間垣集落にとって海からの風は周辺環境および集落自体への影響が最も大きい要因である。臨海の強風下における居住環境の確保や、ニガタケの採取など山からの自然的資源の持続的な活用といった、厳しい自然環境への対応のありかたにも、集落景観の構造が反映していることが伺える。

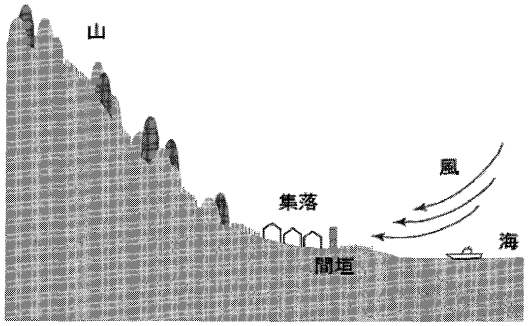


図-2 間垣集落における景観の構造

(2)間垣のタイプ分類

1)間垣の種類

周辺環境および集落調査を通じて、大沢地区および上大沢地区の生活には風の影響が大きく、防風柵の存在が欠かせないものであることが明らかとなった。欠如できないものであるが故に、技術の進歩やライフスタイルの変化に伴い、間垣の形態も変化していることが想定された。そこで、集落内に存在する間垣の形態を調査し、タイプ分類を行った。

現地観察の結果、間垣は厳格な様式によって統一されているわけではなく、いずれも類似した構成をもちつつ、様々な形態があることが確認された。

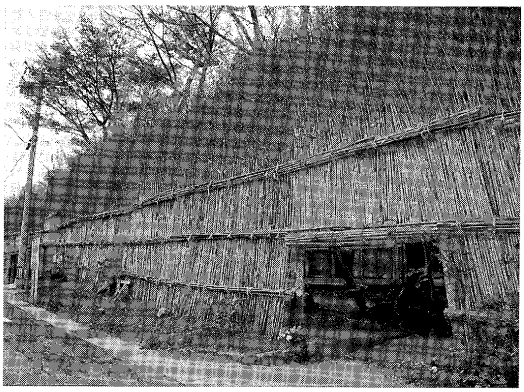
そこで、間垣集落の景観にとって間垣の外観壁面が主要な景観要素であることを考慮し、壁体の主要素材に注

NII-Electronic Library Service

The Japanese Institute of Landscape Architecture

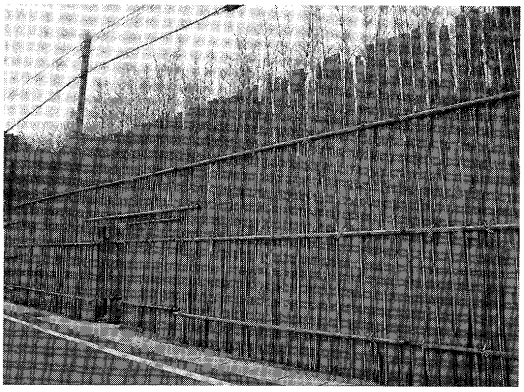
目して間垣のタイプ分類を行った。具体的には、以下3タイプに分類された。

①伝統継承タイプ：地元住民へのヒヤリングから地区に古くから伝わる間垣の形式は、イネ科の多年生常緑笹であるニガタケを用いたものであることがわかった。そこでニガタケのみによって壁体を構成する間垣を伝統継承タイプとした(図－3)。



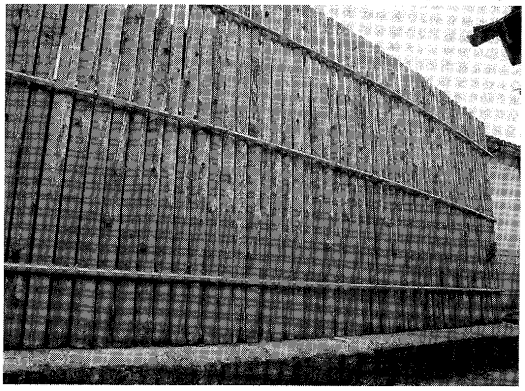
図－3 伝統継承タイプの間垣(上大沢地区)

②混合タイプ：壁体をニガタケのみではなく、木板など他の素材と混合使用している間垣を混合タイプとした(図－4)。



図－4 混合タイプの間垣(大沢地区)

③簡易タイプ：壁体にニガタケを用いず、木板などを代用使用している間垣を簡易タイプとした(図－5)。



図－5 簡易タイプの間垣(上大沢地区)

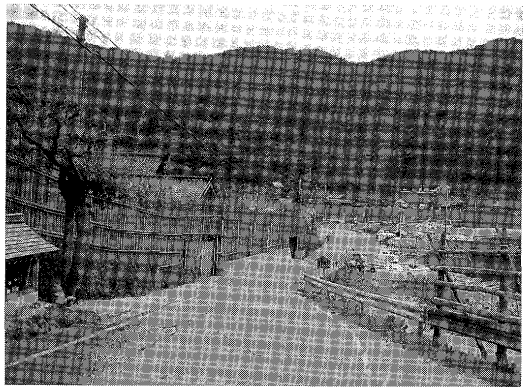
2)集落内の間垣分布

地元住民へのヒヤリングからも、間垣は冬期に吹く海からの強風に対する家屋の保護が目的であり、防風機能に主眼があることがわかった。そこで集落内における間垣の分布や配置状況を整理し、間垣設置目的との具体な関係を明らかにした。

(ⅰ)大沢地区における間垣の分布状況

大沢地区では、43基の間垣が確認され、伝統継承タイプは約37%、混合タイプは約30%、簡易タイプは約33%であった。集落内における間垣の総延長は748mにおよび、主に海岸に面した家屋の前面に、海岸線に対して平行に連続していた(図－6)。また、集落高台の家屋においても一部確認された。

間垣は、家屋敷地と道路の境界に面して設置されるとともに、隣の敷地の間垣とも隙間なく密接して連続するように設置されていた。そのため路上からは、一連の間垣が道路に沿った一体的な構造物のように眺められる。また間垣と家屋の間には一定のヒキがあり、前庭的な空間となっている敷地が多い。



図－6 海岸沿いに連続する間垣(大沢地区)

(ⅱ)上大沢地区における間垣の分布状況

上大沢地区では、36基の間垣が確認された。集落内における間垣の総延長は473mであった。そして、この約80%が伝統継承タイプであった。残りの約20%が簡易タイプであり、混合タイプは確認されなかった。大沢地区同様に、間垣は家屋敷地と道路の境界に面して設置されていた。また、カギ型(⌐)に連続する2つの間垣群が海岸寄りと集落内にあり、集落全体では風に対して二重の構えとなっていた。

このカギ型に囲まれた間垣群の内側には、家屋や倉庫がそれぞれ間垣から数メートル離れて建っている。また多くの屋根の妻面が海を向くとともに、集落内には防風も兼ねた高木が点在している。このことから上大沢地区の外観は、間垣に囲まれた中に緑や家並みが望まれるという、規模の大きな屋敷に似た特徴的な外観となっている。

一方間垣内側は、家屋などの間が路地空間にも似た通路・作業場、園芸の場となっており、住民によるコミュニティ性の高い場所であることが伺えた。このような空間と外部は、間垣の各所に設けられた出入り口によって連絡されており、可動式の扉が設けられていた。また家屋の開口部は、家屋の妻面が海側を向いていることから、これに直行する方角

NII-Electronic Library Service

The Japanese Institute of Landscape Architecture

(東西方向)に多く確認された。

間垣と家屋の間の空間は身近なスケールであり、大きなオープンスペースはないものの、間垣の裏側の空間も資材置き場や作業場として利用するなど、わずかな隙間を生活空間として有効活用している様子が観察された。

(3)間垣の詳細構造

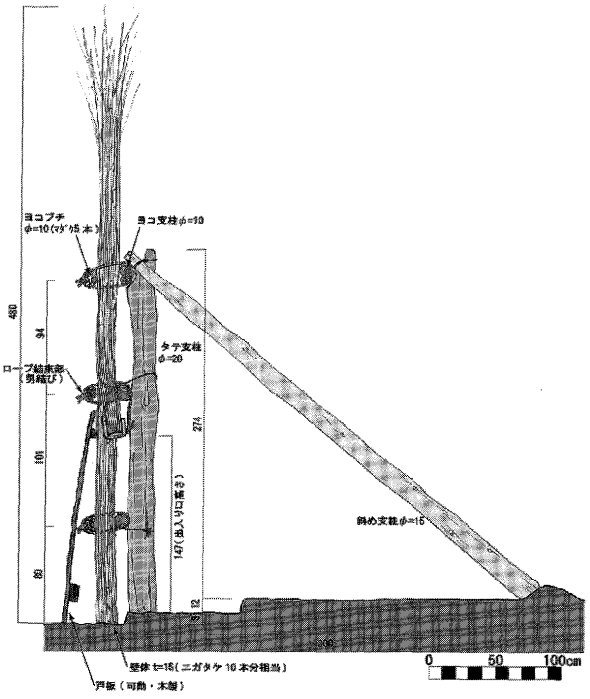
上大沢地区においては約8割が伝統継承タイプの間垣であったが、大沢地区では伝統継承タイプは4割に満たなかった。今後、伝統継承タイプの間垣の保存を図る際、基準となる伝統的な間垣の構成や様式を記録に留めておく必要がある。そこで、伝統継承タイプに分類された間垣を対象として、間垣の詳細構造について調査を行った。

1)基本的な構造

間垣は、①男結びによる結束部、②ヨコブチ、③壁体、④ヨコ支柱、⑤掘立によるタテ支柱、⑥斜め支柱の6要素から構成されていた。これらの要素は、地面から直接組み上げられて一体化しており、家屋等とは構造的に独立している。

断面構成に注目すると、これらの構成要素は道路側から上記①→⑥の順に並んでいる。また道路側からは①男結びによる結束部、②ヨコブチ、③壁体のみが視認でき、背後の支柱は壁体に隠れて見えない(図−7)。 間垣の形状は、高さ3.0〜4.0mであり、2段または3段にヨコブチが渡されている。

間垣の天端及びヨコブチのラインは、地盤の地形ラインに則してほぼ平行である。これに対し壁体のニガタケは、地盤に対して垂直に設置されている。しかし風の力によって、ニガタケは次第に風下側に傾く傾向があった(図−8)。



図−7 伝統継承タイプの間垣断面図

2)構成素材

間垣は、ニガタケ・竹・板、木材、ロープ・針金の素材によって各要素が構成されている。

具体的にはニガタケ等により、壁体、ヨコブチが構成されている。また木材により、掘立によるタテ支柱、ヨコ支柱、斜め支柱が構成されていた。ロープ等により、各部材の結束が行われている。

間垣は道路に面する側と家屋側では印象が異なり、道路側からは垂直に並べられたニガタケが主な景観要素となっている。また壁体の上部と下部では、素材の表情が異なっている。上部はニガタケの枝が多く分岐しているため、箒を立てたような細かなテクスチャとなり、柔らかな輪郭となっている。一方下部はニガタケの茎部が垂直に連続し、簾を立てたような繊細な表情となっている。

4. まとめ

間垣は日本海側特有の風対策を目的とした、地域の固有性が高い景観構成要素であった。しかし間垣に対する歴史的・技術的記録は少なく、また間垣の形態変化も生じていることから、間垣集落の景観保存のためにも維持管理等の技術的記録が至急の課題であることがわかった。

参考文献・補注:

1)岩波書店編集部他(1954):能登:岩波写真文庫 133,pp65

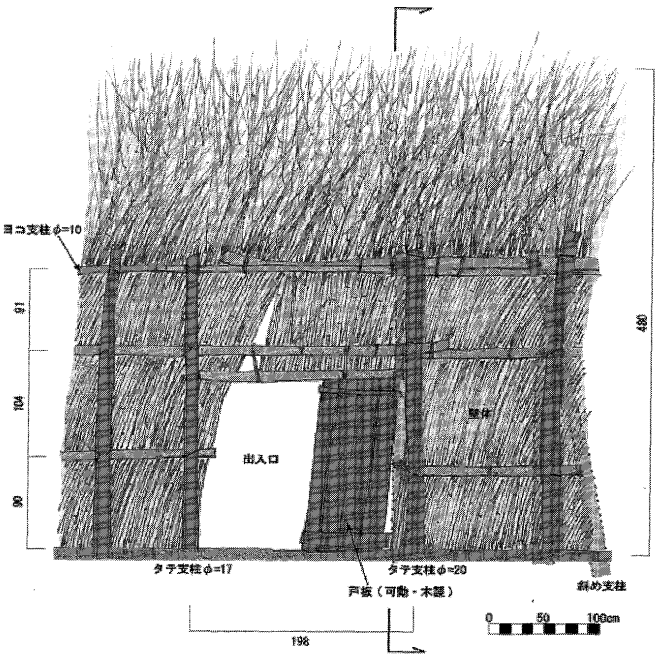
2)亀井望(2007):大沢・上大沢の間垣の現状:金沢大学文化人類学研究室調査実習報告書 vol.22,43-54

3)輪島市史編纂専門委員会(1976):輪島市史:石川県輪島市役所,pp937

4)輪島市(1960):西保村史:輪島市西保公民館,pp516

5)青山高義他(2000):日本の気候景観:古今書院,107-110

6)五色石:上大沢地区の砂浜海岸に打ち上げられる玉砂利のこと。石英粗面岩、硅化木、めのう質のものを主とする。



図−8 伝統継承タイプの間垣正面図

NII-Electronic Library Service